

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2012年11月 NO.170



【もくじ】

- 2～3 ロンドンオリンピック体験記…名木利幸
- 4～5 写真集「昭和年を歩く」シリーズの取材スタンスについて…武吉孝夫
- 6～7 残っていたアマゴ—四万十川上流域の真の再生を目指して…町田吉彦
- 8～9 言葉の現場から36「舞姫」ブランデンブルゲル門のなぞ…広井護
- 10 土佐を元気に！日本を元気に！…土佐おもてなし勤王党かわら版屋りょう
- 11 鎮守の森は今県内の神社めぐり体験記（六）…竹内荘市
- 12～13 高知市文化振興事業団8月～9月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

ロンドンオリンピックピッチ体験記

名木 利幸

今年の夏、ロンドンで行われたオリンピック／パラリンピックでのメダルをかけた選手の活躍を、テレビや、パソコンの前で睡魔と格闘しながら、それぞれの舞台で練り広げられた「ドラマ」に一喜一憂されたことではないでしょうか。サッカーではU-23日本代表ベスト四、なでしこジャパンは初の銀メダル獲得という快挙を達成したことは記憶に新しいところでしょう。

光栄な事に、ロンドンオリンピックのサッカー競技の審判員として日本から五名（男子三名、女子二名）が指名を受け、私は、西村雄一主審、相楽亨副審と日本トリオとして参加しました。オリンピック男子サッカー競技の審判員

として日本人が指名されたのは一九九二年のバルセロナ以来五大会振りの出来事で、二十年の空白を埋める義務、世界中が注目する国際舞台で審判をするその責任の大きさを感じずにはいられません。指名の連絡を受けた日の夜は「僕の悪い癖」でいろいろな事を考え、少し身体が熱くなってしまう、寝付けなかったことを思い出します。

私達の初戦は予選リーグ、ブラジル対ベラルーシ戦。試合直前に雨が止み、青空がのぞき始めたオールドトラフォードスタジアムのピッチはまるで「舞台」の様でした。既に二試合が行われていましたが、舞台の芝生は青々と逞しく、私たちを快く受け入れてくれ

ました。両国の国歌を聞きながら、オリンピックに参加出来た喜び、最初で最後の試合になるかもしれないという緊張感、いつも温かく見守ってくれる高知の家族や友人の笑顔が浮かび、多くの方にお世話になりこの場に立たせてもらった感謝の気持ちで試合に挑む事ができました。

試合は大方の予想と反し、ベラルーシが先制。「あれ、これは入るぞ」と思った時には私の目の前のゴールにボールが吸い込まれていました。その瞬間、審判員でありながら「僕はここでフットボールを楽しめ優雅やな」と喜びを感じつつも冷静になることができませんでした。これが功を奏したのか、それ以降、試合を落ち着いて裁く事

が出来ました。選手、チームそして観衆が試合に集中し、協力してくれたことも幸いし、大きな混乱も無く笑顔でピッチを後にする事が出来、感謝の念で一杯でした。そして中二日で迎えた第二戦は予選リーグ最終戦、ウェールズのミレニアムスタジアムでイギリス対ウルグアイ戦を担当しました。どちらも決勝トーナメント進出を賭けた試合で、しかも勝ち点差が一、四チーム中三チームに進出できる可能性があっただけに、緊張感のある試合でした。どの試合も変わりませんが、ホスト国の試合となると、口ではそういっても実際のところは色んな重みを感じて試合に入る事になりました。「何かあれば一触即発、心して試合に挑もう」と腹を括った通り、試合は最初から熱いものになりました。出てくる汗が、身体を動かした汗なのか、じりじりと押し迫る緊張感からの冷や汗なのか分かりません。ただ、汗を拭くことにも気を使う、そういう試合でした。ファウルの判定が下された後に選手同士がヒートアップしたところに止めに入ったり、主審の見えていない場所で小競り合いが起きて何度かピッチに入る事があり

ました。選手に「来てくれてありがとう、冷静になった、大丈夫だから」と、選手も我々のメッセージをしつかりと受け止めてくれました。オリンピックという国の期待を背負った大舞台で選手の受け持たれたものであり、彼ら自身でさえも自分をコントロールすることが難しいと思いつながら試合を運んでいます。その中で主審は笛を吹き、試合を止め、注意を促し、カードを示すことは、試合を、そして選

手をコントロールする上では大切な事です。また、審判はそれだけで「事を済ませる」のではなく、刻々と変化する選手、チームの置かれた状況、立場を理解して試合を進めて行く事が求められます。我々に与えられる時間は一瞬ではあります、その中で出来る最善の策を常に選択し提供することで、信頼を勝ち取らなければなりません。試合は最終的にはイギリスが一点のリードを守り決勝トーナメント進出を決めました。イエローカードが七枚出た大変難しい試合でしたが、無事に試合を終えることができ、安堵しました。

決勝トーナメントでは、準々決勝で日本が勝利、そして永遠のライバル、韓国もイギリスに勝利しアジア二カ国がベスト四入りを果たしました。アジアが世界の強豪入りをした歴史的瞬間であったのには言うまでもなく、今後、世界がよりアジアのサッカーに目を向けてくる事でしょう。その事実をロンドンで見た事は私にとって価値ある出来事でした。

スタジアムでは通常では見られない光景に出くわしました。サッカーの応援と言えれば熱狂的なサポーターと呼ばれる人々がゴール

裏を占拠し、スタジアムの八・九割はホームチームのユニフォームを着て応援するので、ホームの色に染まるのが常とされています。しかし、オリンピックでは様々な国・地域の人々がスタジアムに足を運びます。担当した試合に限らず、試合とは全く関係の無い自国の国旗を振ってスタジアムの雰囲気を楽しまれる方を多く見る事が出来ました。スタジアムはとてもカラフルでした。これは、スタジアムという空間に自由と喜びを表現したものであるとも言えます。大変美しい光景でした。このとき、高知でもこうした光景をぜひ見たいものだと思つた事をここに書き記しておきます。

ロンドンオリンピックでピッチから眺めた光景で一番心に残っているのが、初戦のブラジル対ベラルーシの試合終了後、観衆の居ないピッチから眺めた空でした。最後と思つて挑んだ試合が無事に終わり、安堵して眺めた空には雲が優しく流れ、青い空が心を癒してくれました。この空をたどって行けばその先には高知がある、なぜかそのような事を思っていました。担当した二試合百八十分という時間は、思い返せばとても短い時

間で、夢のような時間を過ごさせていただきました。このような機会を与えていただいたのも、多くの方と出会い、支えていただいたおかげかと、本当に心から感謝しております。ありがとうございます。

最後になりましたが、高知で過ごしの皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。



なぎ としゆき

一九七一年 安芸市生まれ
高知高専卒業。JFA 1級審判員／プロフェッショナルレフエリー。国際副審としてJリーグや国際試合で活躍中。



筆者

写真集「昭和年を歩く」シリーズ の取材スタンスについて



武吉 孝夫

昭和五十一年の春、二十九歳の私は高知市桜井町に小さなアパートを借りた。

その目的は高知市内をくまなく歩き、辻々を記録として撮ってみようという、さわめて曖昧な発想からだった。

当時は現在よりもコンテストの盛んな時代で、私もご多分に漏れず、四十万十川の民俗行事の記録を主テーマとしていたとはいえ、一枚傑作主義的写真を重視していた。対象に自己の気持ちを投影した感情移入があり、しかも対比の構図を取り入れバランスよく気持の良い写真作品を人並みに目指していたのだった。

しかしそのような狙いすました構図、いわゆるアンリ・カルティエ

時、そこに写っているのはまさに今を息づく街の姿であった。
なんでもない日常の見慣れた光景の中に、そこに暮らす人々の意識の集積と歴史の痕跡が在るのではないかと思うようになった。
そこに佇む風景はそのままで充分すばらしく、その前に立つ私は、ただ素直にひざまずき（そういう気持ちで）シャッターを押せばよいのだと思えるようになっていた。
この心が芽生えなければ、とても市内全域を撮り終えることはできなかつたであろう。

無数に存在する角度や地点、その中でどこをどう切り取るかということは実撮影としてはせざるを得ない選択だが、どの地点も等価であることを意識して努めた。
影で暗部が潰れる晴天の日はなるべく避け、曇り日を中心に撮った。そして情報量が多く写し込めるように、角度にも気をつけた。
気がついてみると、あれから三十六年の歳月が流れていた。

記録性の濃い写真群なので、当初は半世紀か一世紀後発見され、発表されることでもあれば資料ぐらいいはなるだろうと考えていた。それでも時の経過は、目の目を見ないであろうと思われていた写

エリブレッソンの決定的瞬間のような特異な瞬間が、本当の現実であろうかという疑問も持っていた。もちろん本場の現実でなからうとも、作品として表現する」とわ

ただ、さまざまな表現メディアのなかで写真の持ち合わせている最大の属性は、記録性にあることも事実である。
作品として写真をする事、記録として写真をすることへのわだかまりのようなものが、私の内部には常にあった。

今ここに、対象にカメラを向ける私がいるとする。そしてシャッターを切った瞬間から撮られた写真は「今、ここに」から「いつ、

真群にご褒美を与えてくれた。
このたびの東日本大震災、原発事故、やがて起こるとされる東南海地震やら、五木寛之の『下山の思想』などもヒントとなって、写真に写っている昭和五十一年当時の記憶や思い出として共有できる方々の多い今、発表するのも意義あることかと思うようになった。その時代に生きる者にとって、重要な時代だからこそ、三十六年前の私の拙い写真を見て、おもしろいと思ってくれる方々も居るのだろう。

撮影されている地点が膨大なので、市内を七地区に分け、ポツにせざるを得ない多くのカットを惜しみながら編集作業をすすめている。回想の一助にでもなれば幸いですと考えている。

たけよし たかお

一九四六年 窪川町（現四万十町）生まれ
一九六九年、日本写真専門学校卒業。一九八三年、写真のたけよし開店。写真同人「現」所属。

どこで」に変わる。

純粹アートの写真は別としてこの「いつ、どこで」が瞬時に想い起こされるのが、写真の特質（属性）だといってもいい。

坂本龍馬の写真は何枚か残されている。しかし、龍馬の生まれた家（家並み）の写真は極端に少ない。龍馬の生家は彼の死後も二十年代は残っていたというのに。そして写真は、その後急速に普及していったというのに。龍馬の生家や彼の遊んだであろう近隣の当時の町並みの写真を、今見ることができたら、その時代が増幅して見えてくると思うのだ。

では龍馬の時代だけが重要なのだろうか考えた時、百五十年前も百年前も三十五年前も、今も等

しく時代のページであることに気が付く。解りやすく龍馬を例にとつたままで、等価に時代をとらえ記録をしていこうとすると、なんちゃじゃないように一見できる日常の中に、捨てがたいそれぞれの時代性を見ることが出来る。
そしてこれこそが写真の持つ力であり、現代的に言うならば写真力と言う事だろう。

そこで思いついたのが、ひと夏（いつ）を限って高知市全域（どこで）をなるべく私意を入れずニユートラルな視点で、どの地点も等価に撮ってみてはどうだろうかという試みであった。

日常があるがままに、人間の視覚に近い三五ミリの単体レンズ一本で、通常の目の高さで坦然と撮り進む。いわば、なんちゃじゃない写真なので簡単なことだと思っていたのだが、取り組んでみるとなかなかエネルギーのいることだった。

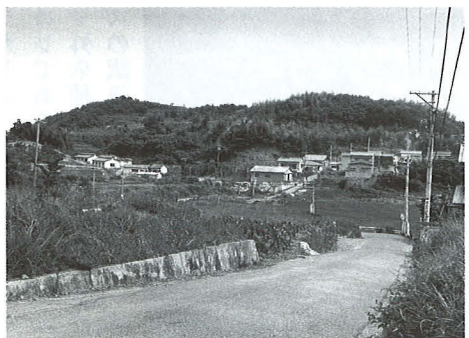
目の前に起き得ているおもしろい事象や興味のある光景であれば自然と食指も動くが、なんちゃじゃなくても撮るといふことは、しんどいことだと想像していた。

しかし最初の現像をして、コンパクトプリントをルーペで覗いた

●昭和五十一年に私が写した写真です。この四枚の場所、どこか分かりますか？（答えは十五ページ下にあります）



①



③



②



④

残っていたアマゴ

—四万十川上流域の真の再生を目指して—

町田 吉彦

サケ科魚類は実にややこしい。今回の話題の中心であるアマゴは、種としてはサクラマスであるが、より細かいレベルで示すと次のようになる。

○サクラマスという種は四亜種に分かれる

サクラマス（亜種）

降海型の名称はサクラマス

陸封型の名称はヤマメ

サツキマス（亜種）

降海型の名称はサツキマス

陸封型の名称はアマゴ

ビワマス（亜種）

琵琶湖とその流入河川に生息

タイワンマス（亜種）

台湾の河川のみに生息

ビワマスとタイワンマスから分

概念にインヴェイシブ・スピーシスがあり、こちらは侵入種と訳されている。外来種と言えればルーツが海外と誤解されがちであるが、外来種や侵入種はルーツが国外か国内かを問わず、また、意図的であるかどうかを問わず、自然分布していなかった地域に新たに定着した種を示す術語である。すなわち、高知県の放流アマゴは外来（侵入）アマゴなのである。同種であれば他所から導入しても構わないという見解は当然ながら存在する。ただ、自然における種は遺伝子集団として存在しており、集団特有の遺伝子を保有している。すなわち、同種を他所から導入する場合、遺伝子汚染を覚悟せねばならない。近年、在来アマゴを調査し、保護しようという動きがいくつかの自治体に見られる。世界的潮流となった、生物多様性の維持の具現である。高知県にも在来アマゴが生息しているらしいという噂は聞いた事があるが、前述のように放流天国である。溪流釣りが盛んな吉野川や物部川の上流域はすべて放流アマゴであるというし、四万十川でも同様の状況と考えざるを得なかった。この状況で、奈半利川のアマゴを研究し、DNA分析

かのように、亜種は種の地域集団である。サクラマスは日本では日本海側と北日本に分布し、サツキマスは神奈川県以西の太平洋側、瀬戸内側、四国、九州の瀬戸内海側（大分県北部）に分布する。このように、亜種は海や山脈などにより分布域が分断されていて、互いに形態や習性が微妙に異なる集団と理解されている。

混乱を避けるため地理的に限定されているビワマスとタイワンマスを除けば、亜種のレベルでは本州と九州にサクラマスとサツキマスがいるが、地質年代的に新しい四国にはサツキマスしかない。しかも高知県西部の河川はその分布の南限となる。サツキマスの降海型、すなわちサツキマス（ややこしくて申しわけない）はどこで

により日本で三番目の在来集団が存在することを証明した岡部・小松両氏の論文は先駆的な業績である。

世の中はとにかく広い。地方には生き字引と言える人たちが暮らしており、津野町の豊田庄二さんその一人である。四万十川を本流とする渡川水系の動物ならなんでも知っている。彼は以前から在来アマゴを探し続けており、生地をかなり絞り込んでいたのだった。「よみがえれ四万十源流の会」の活動で知り合ったのであるが、その博識ぶりにはただただ感嘆するのみであった。

豊田さんを含む地元の方々と一緒に調査を開始したのであるが、最初は空振りの連続。目にするのはすべて放流個体であった。何日目の調査だったろうか、忘れもしない二〇〇七年十月二十一日のことである。津野山郷の川で想定外のアマゴに遭遇した。放流アマゴの体側には九（まれに八）個以上の細長く黒っぽい斑紋がある。これはサケ科の多くに見られる斑紋で、パーマークと呼ばれる。得られた魚のパーマークは六個で、しかも幅がやたら広い（写真参照）。こんなアマゴはこれまでに

も小集団であり、一般に知られているのはサツキマスの陸封型であるアマゴである。

アユは「清流の女王」として人氣が高いが、アマゴには「溪流の女王」の呼称がある。高知県でもまた他県の多くでも「あめぐ」「あめのうお」の地方名で呼ばれており、甘子、天魚、雨魚などの表記がある。厳密ではないが、ほぼ撰氏二十度以下の水温に適應しており、四国では河川の上流域から最上流域でないと生息できない。ところが四国に限らず、在来アマゴの生息地に人工養殖されたアマゴが放流されている。高知県の放流アマゴのルーツは長良川水系とされており、明らかによそ者なのである。本年公表された高知県内水面漁業センターの岡部・小松両

見た事がない。豊田さんもこれほど大きなパーマークのアマゴは初めてとの事であった。痛いほど冷たい水に浸った体のしびれを忘れるほどの感動であった。

この感動を増幅したもうひとつの要因がある。これらを発見する前に、衝撃的な魚に出くわした。本来四国にいないはずのイワナ、すなわち密放流されたイワナである。イワナもサケ科であるが、有名な悪食。魚はもちろん、カエルやヘビまで、動く物ならなんでも食べる。彼らが確認された場所では、ものみごとに彼らしかいない。在来放流かを問わず、アマゴは瞬時に襲われたらう。イワ

ナが演じられている舞台は、おそらく自分たちの子どもを餌にした、すなわち、共食い生き延びてきたのであろう。

これらが演じられている舞台は、実は巨大な砂防堰堤で挟まれた区間である。税金の無駄遣いと揶揄されたほど多く造られ、人が近づくのも難しい場所にある砂防堰堤が、実は密放流のイワナと放流アマゴの分布の拡大を防ぎ、在来アマゴを保存していたのは疑いない。だがこんな、偶然と必然が絡み合った、奇跡的な結末を想定していたらう。この事実が、在来アマゴの保存に向けての貴重なヒントとなったのはもちろんである。



津野山郷の在来アマゴ



津野町の放流アマゴ

氏による論文によれば、高知県のアマゴの放流量は百一十尾で、全国第二位であるという。全国では九百九十七万尾であるから、高知県は放流アマゴの天国に近い。高知県に限らないが、豊かな自然を謳い文句にしている、放流事業の定番であるウナギとコイ、地方によってはさらにニジマスを加え、川の中では人工放流の魚が珍しくない。中・下流域や静水域のブラックバスやブルーギルに対しては「日本の自然を破壊している。ケシカラン」と言いながら、実情はコレである。

外来種はエイリアン・スピーシスの訳語である。まったく同様の

まちだ よしひこ

一九四七年 秋田県生まれ
高知大学名誉教授。理学博士。
高知県文化財保護審議会委員、
高知県希少野生動物保護専門
委員、NPO法人四国自然史料
学研究センター理事長など。専
門は水生動物学、地域の自然史
科学。

「舞姫」―ブランデンブルゲル門のなぞ

はじめて「舞姫」の授業をしたとき、生徒からこんな質問を受けた。「『ブランデンブルゲル門』って『ブランデンブルク門』のことですか？」

「舞姫」の舞台は十九世紀のベルリンである。ベルリンの象徴であるブランデンブルク門が描かれている。「どうだよ。」と答えると「だったらどうして、他のページでは『ブランデンブルク門』って書いているんですか？」と聞かれた。

一瞬間の意味がわからなかった。何度か聞き返し、やっとわかった。ブランデンブルク門の描写は「舞姫」中に二度出てくる。一度目は豊太郎がベルリンに到着したその時。二度目は豊太郎がベルリンを去る直前である。ところがこの二度の描写で、門の名の記述が異なるのである。以下を読み比べていただきたい。

△遠く望めばブランデンブルク門を

だのではないか。

* Tor (トア) 門
実際のところ、明治時代の日本で「ブランデンブルク門」という呼称が一般的だったかどうか、私にはわからない。しかし「ブランデンブルゲル」がドイツ語の発音に近いことは事実のようだ。

ちなみに「Brandenburger」は、「Brandenburg」(ブランデンブルク)という地名に「er」がついたものである。「er」がつくことで「ブランデンブルク」という意味になる。

かつてベルリンには十八の城門があり、どれもその門の先の都市の名前が門の名称になっていたという。十八の城門の中で「舞姫」の時代まで残ったのは、「Brandenburger Tor」だけだったのである。「ブランデンブルク」の門は「ブランデンブルク」向かう門」だった。

「ブランデンブルク門」と「ブランデンブルゲル門」の違いは、「赤門」(本郷の)と「赤い門」の違いと似ているのではないか。「赤門をくぐる」と言えば、たんに「門をくぐる」という意味ではなく、「最高学府である東京大学(あ

隔てて緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮かび出でたる凱旋塔の神女の像(到着直後)

回もはや十一時をや過ぎけん。モハビツト、カルル街通ひの鉄道馬車の軌道も雪にうづもれ、ブランデンブルゲル門のほとりの瓦斯灯は寂しき光を放ちたり。(去る直前)

Aでは「ブランデンブルク門」なのに、Bでは「ブランデンブルゲル門」になっている。

これはどうしたことだろう。…と軽い驚きを覚えた。ところがそのときは、教科書の誤植じゃないかな、と答えてしまった。

その後気になって様々な教科書の記述を調べてみた。どれも「ブランデンブルク門」と「ブランデンブルゲル門」を書き分けている。筑摩書房の森鷗外全集も調べたが、同じ結

るいは東京帝国大学)に入学する」という輝かしい意味が含意される。「赤門」という固有名詞からは一種のオーラが出ている。

一方、「本郷の赤い門を通る」と言えば、これは「本郷の門を通る」というだけの意味になる。その門がたまたま赤かったということである。

ドイツに到着したばかりの豊太郎にとって、首都ベルリンの中央にそびえ立つブランデンブルク門はオーラを発する栄光の門だった。そのかなたには、凱旋塔(普仏戦争の勝利を記念する高さ六十メートルの石柱)の上に、黄金の勝利の女神像が輝いていた。豊太郎は、ブランデンブルク門と勝利の女神に向かって出世を誓ったはずである。彼は出世と栄光のためにベルリンへ留学したからである。

当時ドイツ帝国はヨーロッパの最強国であり、ベルリンの中央に立つブランデンブルク門をあおぎ見ることは、文字通り「世界の中心で栄光を夢見る」ことだった。

だが、五年間のベルリン生活は豊太郎を変えた。豊太郎は、出世の世界に自分の心を満たすものが何もないことを悟った。同時に出世の世界でしか自分が生きてゆけない人間であることも骨身にしみて知ったのである。

果だった。書店でみかける文庫本ももちろん同様である。

どうやら「ブランデンブルク門」と「ブランデンブルゲル門」の書き分けは、出版当初からのもののようにだ。

日本近代文学の研究者として知られる石原千秋氏に「テキストはまちがわれない」という著書がある。その「まえがき」で石原氏は「研究者は…テキストの可能性を限界まで引き出すのが仕事…」と主張し、「その前提は『テキストはまちがわれない』という信念を持つことである。小説テキストでは、ほんの細部にこそ、また一見錯誤と見えるような表現にこそテキストの可能性が秘められている…」と述べている。

私も現代文の授業をするなかで、同じ思いをすることがよくある。「ブランデンブルク門」と「ブランデンブルゲル門」の書き分けについては、誤植とみなす前に、何らかの意味を仮定してみる価値があるかもしれないと思うようになった。

主観的な感じを言えば、Bの「ブランデンブルゲル門のほとりの瓦斯灯は寂しき光を放ちたり。」の部分は非常に響きが良い。「ブランデンブルゲル門」という古風な響きが、瓦斯灯の「淋しき光」のイメージとしっくりと調和している。このフレ

エリスを裏切り、天方大臣からの帰国の誘いを受け入れた豊太郎は、そのことをエリスに告げる勇気がなく、雪の降りしきる公園のベンチで夜がふけるまですわっていた。そして眠ってしまった。ふと目をさましたときの描写がBである。

回もはや十一時をや過ぎけん。モハビツト、カルル街通ひの鉄道馬車の軌道も雪にうづもれ、ブランデンブルゲル門のほとりの瓦斯灯は寂しき光を放ちたり。

この門が、栄光の門である「ブランデンブルク門」ではなく、オーラの消えた「ただの門」、「ブランデンブルゲル門」として記述されていることは、この場面にまことにふさわしい。「ブランデンブルゲル門」は「ブランデンブルク」向かう門」であって、それ以外の何物でもない。

このあと豊太郎は、よろめきなからエリスの待つ屋根裏部屋に帰り、事実を告白しようとして昏倒する。意識がもどったとき、エリスはすでに発狂していた。親友相沢謙吉が、豊太郎に代わって事実(豊太郎の裏切り)をエリスに告げていたからである。

この悲劇的な展開の中に挿入される「ブランデンブルゲル門」という

ーズは、意識的な努力をしなくても自然に暗唱してしまうフレーズである。

だが知りたいのは、この書き分けの意味である。

今年久しぶりに「舞姫」の授業をしたとき生徒たちに問いかけてみた。「誰か思いつく人がいたら教えてほしい。どうして、はじめは『ブランデンブルク門』だったのが、物語の終わりには『ブランデンブルゲル門』に変わっているんだろう。どんな仮説でもいいから言いに来て下さい。」あまり期待せずに言ったのだが、生徒たちは強い関心を示した。そして、何人かの生徒は自分の仮説を紙に書いて持ってきたのである。その中で興味深かったもの二つを紹介したい。

第一の説は以下である。

「舞姫」という物語の「語り手」は豊太郎である。豊太郎の視点を通して「舞姫」の世界は語られている。ベルリンに到着したばかりの豊太郎の意識は、まだ日本的だった。そこで日本的に「ブランデンブルク門」と呼んだ。ラストシーン近くの豊太郎は、すでに五年間のドイツ生活をおくっている。意識がドイツ人化しており、ドイツ語の「Brandenburger Tor」の発音に近い「ブランデンブルゲル門」と呼ん

呼称は、ひかえめながら一つの意味をおびている。そう考えることも可能ではないだろうか。

以上二説を、ドイツ語に詳しい知人に紹介し、意見を聞いてみた。「ブランデンブルゲル門」という呼称がドイツ語の発音に近いという説は納得できることであつた。しかし二番目の説は納得できない、ドイツ語になじんでいる者にとっては、「ブランデンブルク門」も「ブランデンブルゲル門」も、全く同じ一つの門を指していると感じられる、作者か編集者が書き間違えたのだからという意見だった。

「テキストは間違わない。」という石原千秋氏の説と真逆の見解で、それはそれで興味深かった。

「誤植」なのか「差異」なのか。それを考え悩むことも読みの醍醐味である。名作の細部は侮れないと、あらためて思ったことだった。

ひろい まもる

一九五四年 高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学
科卒業後、私立土佐中等学校
に勤務。国語の教師。

土佐を元気に！日本を元気に！

土佐おもてなし勤王党

かわら版屋りよう



昨年、土佐勤王党結成から百五十年の年に、激動の幕末をかけた土佐の志士達が、「土佐おもてなし勤王党」として甦りました。

メンバーは坂本龍馬、武市半平太、中岡慎太郎、岩崎弥太郎、岡田以蔵、かわら版屋のりようの六人。

活動は幅広く、高知駅前にある「こうち旅広場」でのおもてなしや観光案内、土日・祝日には一日三回のステージショー、県内の様々なイベントへの参加や、全国各地での高知のPR等様々です。ブログでも、メンバーそれぞれの視点で、観光やイベント情報を発信しています。

活動は幅広く、高知駅前にある「こうち旅広場」でのおもてなしや観光案内、土日・祝日には一日三回のステージショー、県内の様々なイベントへの参加や、全国各地での高知のPR等様々です。ブログでも、メンバーそれぞれの視点で、観光やイベント情報を発信しています。

メンバーの話す言葉は、龍馬伝と同じ幕末の頃の土佐弁です。高知の玄関口で、坂本龍馬が「よう来たのう」と迎えてくれるという事で、県外からのお客様に大変喜

んで頂いています。しかもイケメン揃いとあって、わざわざ高知へ会いにくる若い女性も多くいます。けれど、見た目だけではありません。活動の根底にあるのは、故郷への愛、人との繋がりや志(夢)を持つ事の大切さを伝えたいという想いです。

ステージショーは、そんな想いの詰まった二十分のミュージカルです。現在は高知県観光の顔として、地元の方にも知って頂き、多くのリピーターやファンの方がショーを見に足を運んで下さっています。結成当初は、駅前でチラシと風船を配る所から始まりました。

メンバーは殆どが芝居も歌もダンスも未経験者。一日八時間、約二ヶ月の稽古を経て、何とか舞台上に立つ事が出来ました。その年のテーマは「絆」。その



土佐おもてなし勤王党

テーマが決定した後、東日本大震災が起こり、偶然にも、全国で「絆」という言葉が復興のテーマとして叫ばれました。あの地震で失ったものはあまりに大きく、日本全体が落ち込んだ一方で、一人一人が、本当に大切な事は何かを考える機会となりました。私たちは、自分たちの出来る事をしよう。まずはこの土佐を元気に！そして、その元気を全国へ届けようという想いを一つに取り組んできました。

そんな皆様の声があり、二度の活動延期が決まり、今年度いっばい、高知駅前であう事が出来ます。ぜひ、一度足を運んでみてください。土佐魂を胸に、土佐の偉人達が、皆様を笑顔でお待ちしています。

結成から一年半、その願いは少しずつ伝わり、今では小さな子供からご年配の方まで、県内外の多くのファンが応援して下さいます。

とさおもてなしきんのうとうかわらばんやりよう
百五十年の時を超え、現代に蘇った土佐おもてなし勤王党の紅一点。二〇一一年四月に結成、同年七月にステージデビュー。高知県内はもとより、東京ドーム、ナゴヤドームなど、高知県外の公演も多数。

(まとめ)

三年間かけて、県内の神社めぐりで見せていただいた神社が、約三千神社にもなる。写真のほか祭神、由緒等のメモが、かなりのボリュームになった。これを一冊にまとめることにしたのだが一苦労。全ての神社となるとページ数が多く経費的にも困難。一定の選別が必要と考えた。

こうして選んだ二千二百七十六神社をまとめたものが「鎮守の森は今」である。それでも神社の案内地図やお祭りの内容等は省略せざるを得なかった。自費出版の悲しさである。

一案として、私が選んだ「高知県内の三百神社」を考えて、まとめにかかったが選別が難しい。二案として、旧社格制度の県社、郷社、村社等の有格社のみにしように考えた。確かにそれらは立派な神社ばかりである。ところが、無格社だった神社の中にも、立派な神社が多数ある。そもそも今日、今はなき社格制度を持ち出すこと自体に問題がある。

本への反響も現れた。その第一は調査漏れである。「隣部落の神社は載っていないのに、うちの部落の神社を載せていないのはどういう理由で」「私は五人の子供を育てた。生まれる度に、初参りに連れて行った氏神が載っていないのは悲しい」等々の苦情である。またある方は、地域内で漏れている神社の一览表を作って送って下さった。これらのいづれに

第一に、鳥居があること。第二に、神職が神殿内に入って、祝詞奏上ができる大きさ以上であること。

対してもお詫びを申し上げ、追加調査することとした。テレビ、新聞等でもその旨を説明し情報の提供を呼びかけた。その結果、多くの情報を寄せて頂いた。約一年かけて追加調査をして追補版を出したのだった。

たけうち そういち

一九三八年 高岡郡四万十町生まれ
専修大学法学部卒業。高知宮林局(特)損害保険料率算出機構高知調査事務所(社)日本損害保険協会高知相談センター等に勤務。



鎮守の森は今

県内の神社めぐり体験記(六)

竹内 荘市

この条件でまとめに取りかかってみると、また矛盾が生じた。鳥居がなくても大きくて立派な神社がある。また、小さな神社でも歴史があり除外できない神社もある。そこで第三の条件を追加することにした。

反響の第二は、神社名が間違っているという苦情である。どの神社も私が勝手に名前をつけた覚えはない。必ず何かに基づいて書いたつもりである。①神社境内に建っていた案内板に従って書いていたら、実はその案内板が間違っていた。②神社近くの人に教えてもらって書いていたら、実は数年前に合祭があり神社名を変更していた。近所の人もそれを知らなかった。③神社の額に明記してある神社名を書いていたら、神主さんが、あれは氏子達が勝手に書いたもので、本当の神社名ではないという。その他、所在地名が違っている。

松田弦ギターリサイタル

二〇〇九年東京国際ギターコンクールで日本人として十一年ぶりの優勝を飾り、国際派クラシックギタリストとして活躍する松田弦氏のリサイタルが八月十八日(土)にかるぽーと大ホールで開催された。岡豊高校出身で現在フランスのストラスブール音楽院に留学中



の松田氏は、この演奏会のため一時帰国を果たしてのリサイタルとなった。

今回のプログラムは、松田氏の「ギター奥深さを伝えたい。その真髓にしっかりと取り組み魅力を感じたい」との熱い思いから、本格的なギター曲を中心として組まれた。途中、曲紹介やトークなどが一切ない、ピンとはったギターの弦のような緊張感のなか紡がれた音たちは、温かさや深いやさしさに満ち溢れ、煌々と輝きながら会場を埋め尽くした。

日頃クラシックギターには馴染みの薄い観客が多かったようだが、「素晴らしかった」「彼は本物だ!」「また是非来てもらいたい」など多くの言葉をいただき、来場者には新鮮で心豊かなひとときを過ごして頂けたようだ。

第10回詩のボクシング 高知大会

二人の朗読者(朗読ボクサー)が自作の詩を交互に朗読し、ジャッジが判定を下していく「詩のボクシング」。記念すべき10回大会を八月二十五日、小ホールで開催。団体戦四組、個人戦二十人が出場。団体戦では「秘密結社イデア」と「昭和歌謡曲B面」が、全国大会出場を決めた。また個人戦では新人が敗退する中で、ベテラン勢が熱戦を繰り広げ、高瀬草ノ介選手が、三度目の高知チャンピオンに輝いた。前二団体と高瀬選手は十月二十七日に横浜で開催される全国大会に出場することとなる。



三度目の高知チャンピオンに輝いた高瀬草ノ介選手

「かるぽーと音楽体験プログラム」 「それいけ!音楽たんけんたい!」

親子で楽しめる体験型音楽プログラム、「それいけ!音楽たんけんたい!」を九月九日(日)かるぽーと七階市民ギャラリーで開催しました。音楽を聴くだけではなく、見てさわって体験して、一緒に演奏にも参加しよう!と盛りだくさんの催しです。

「音楽探検コーナー」では、弦楽器、木管楽器、金管楽器、打楽器のそれぞれの部屋で、高知交響楽団の皆さんが楽器の名前や特徴、音の鳴る仕組みなど演奏をまじえて、楽しくわかりやすく解説しました。また、楽器体験コーナーでは楽器堂さんのご協力により、ヴァイオリン、フルート、トランペット、ウクレレ、電子ドラムと、ふだんさわる機会の少ない楽器の演奏を教えるもらって実際に音を出したり、楽器作成コーナーではガッツキツカン主宰の北村剛さんの指導により、四種類のオリジナル楽器を作りました。

ステージでは、キャスさんのウクレレとトラのしまたろう(坂野

志麻さん)のアコーディオンコンサートが行われたほか、会場のところどころに突然しまたろうが現れ歩きながらアコーディオンを弾いて、子どもたちは大喜び!

最後は高知交響楽団さんのミニコンサート。「おもちゃの交響曲」という曲では、自分で作ったオリジナル楽器を持った子どもたちがステージで一緒に演奏するという場面もあり、音楽の楽しさを会場の皆さんに体感していただきました。



バーデン市劇場 オペラ「トスカ」

九月二十六日(水)、かるぽーと大ホールでオーストリアのウィーン郊外のバーデン市劇場によるオペラ「トスカ」が上演されました。来日十七年で三百回公演を達成した本年は、演出監督のルチア・メシユヴィッツが公演に先立ち挨拶。三幕からなる構成で「妙な調和」「星は光りぬ」「歌に生き、恋に生き」等のイタリアオペラを代表するような名曲を高らかに歌い上げました。

豪華なセットにオーケストラピットを利用した生演奏、字幕スローパーもついて分かりやすいストーリー構成、一流のオペラを聞けるまたとない機会に観客からは「ブラボー」の声。贅沢な一時を味わいました。

アンケートでも、「人生最初のオペラがこの公演で良かった」。「話がシンプルで字幕もあったので分かりやすかった」等、好評をいただきました。

(入場者数・五百八十六名)。



美術中級講座

日本画スキルアップカリキュラム

今回の講座は箔を用いた「揉み紙」という技法による日本画制作を行います。「揉み紙」は和紙をくしゃくしゃに丸めて広げ、それに絵を描いていく技法です。今回は土佐麻紙を使用し、和紙の質感も味わいながら、2日間で集中して作品を制作します。

日時：12月1日(出)・2日(日) 両日とも10:00~17:00

会場：高知市文化プラザかるぼーと 10階絵画室

受講料：5,800円(材料費別途要)

定員：先着10名

対象：16歳以上で、30号以上の制作経験のある方

講師：野角孝一(高知大学教育学部講師 美術教育日本画担当)

お申し込み・お問い合わせ：高知市文化振興事業団 TEL088-883-5071

風伯

悠久の月

かいほのかな明るさは、見る人のこころを豊かにしてくれる。むしろ秋や春だけではない。夏の夜の月は、「月涼し」といって昼間の暑さを忘れさせてくれるような涼しさを演出してくれる、冬の冴えて寒たい月もある。「枕草子」に「すさまじきもの(興さめ)」として「師走の月夜」といっているが、冴えた月の光

単に「月」といえば秋だし、秋といえは月というように、秋は月がもっとも美しく見える季節といえる。九月三十日は台風一過、晴ればれとした西の空に太陽が傾くと、雲間からささええとした月が見え隠れし、ひとしお澄みわたった清らかな満月を見ることができた。月は秋とはいえ、春の「朧月」の柔ら

にほんのりと浮かぶ雪の明るさは、冬でしか味わえない幻想的な風景である。ところが、温暖化で、高知などは亜熱帯から熱帯に近い気候になりつつある。干魃に至る処で深刻な干ばりを見せられている。最近の台風だつてそうだ。台風銀座といわれた高知を避けて通つてくれる。これまで起こったことのないような世界中の地域で洪水が頻発している。地球の崩壊が始まっているといつてもいいかも知れない。

それでもまた、気候の変化を感じている人箇々に、四季折々に月は違つて見えてくる。そんな地球から見る月だけは、どこまでも変わらず悠々である。月は春の花とともに文学、とくに日本の詩歌にとっては欠かすことができない。月に感情を託して、長い間多くの詩歌に詠われてきたが、そんな詩歌を理解することさえ出来ないような地球環境になるのかも知れない。(霧)

World Music Night vol.12

~世界の音楽と料理を楽しむ夕べ~

世界の音楽と食べ物を一度に楽しめる人気プログラムの第12弾。今回はアメリカの実力派シンガー、メロニー・アーヴィンさんと、ピアニストのクリスチャン・ジェイコブさんを招き、とっておきのジャズの世界をお楽しみいただきます。

日時 12月18日(火) 18:00 開場 18:30 開演

会場 高知市文化プラザかるぼーと小ホール

料金 全席自由 前売り:2,000円 (当日:2,500円)

※未就学児入場無料、フード・ドリンク代は別。



お問い合わせ 高知市文化振興事業団 TEL088-883-5071

今号の表紙

「思慕の木」

森本 茜

このデザインは、十一月の寒さにも乗り越えられる木というテーマで制作しました。

葉の色一つ一つを暖色で配色し、全体を柔らかいタッチで仕上げました。

(もりもと あかね/ 国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)

P5の質問の答え

- ①追手筋二丁目のひろめ屋敷。現在のひろめ市場。
②四ツ橋付近。現在のかるぼーと前。右が九反田、左が菜園場町。
③横内。向いの小高い山は開発され横内南光台地となり、横内小学校もできています。
④高埴。奥に見えるのが比島。高知市内でも激しく変化した所の一つ。



高知を撮る

棚田のファミリーだよ

青木 英雄

第28回写真コンテスト入賞作品

(平成23年10月 土佐町高須)

この地で農業を営んでいる澤田さん夫妻がつくっています。山村はさびれていますが、ここを訪れて棚田を応援しましょう。

屈託なく長々と電話でおしゃべりしているのを見てみると正直うらやましくなる。もうそんなことを言っている時代ではなからうが、われわれの世代は、潜在意識のどこかにメカニズムに対する抵抗感がある。機器を介しておしゃべりするのには馴染みきれないものがある。会話はやはりフェイス・ツー・フェイスが本ではないか。

ケータイと手紙



風俗歳時記

「世界を茶の間に」といわれたのがテレビだった。確かに世界のニュースが茶の間で臨場感をもって見られるようになり、グローバルな時間距離はぐっと短縮された。それをゼロの域にまで近づけたのがインターネットだ。これはもう「二十四時間即応社会」の実現になった。世界中どこでも待ち時間なしで結ばれたのだ。そしてその汎用化を象徴してい

るのがケータイである。これほどメカと生活が結び付いたものはない。老若男女、誰もが手放せないものになっている。便利な機器の登場というだけでなく、コミュニケーションの質まで変えている。あおりを食っているのが手紙である。ある雑誌を読んでいると、二十歳前半の若手人気俳優が「僕は手紙という文化を知りません。多分僕の世代はみんなそうだと思うます」と語っている。理由はこうだ。彼らの世代は子どもときからポケベルがあり、中学に入るともうみんなケータイを持つようになって、連絡はもっぱら電話かメールになったというのだ。なるほど、「手紙」という通信手段を否定しているのではないが、もうそうしたものは必要ないというのだ。

もう一度、なるほどと頷きながら、手紙というコミュニケーション文化がやせ細って、さびしい世の流れである。(霧)

第8回美術作品コンクール

CONCOURS des Tableaux

高知市文化振興事業団では、若手の美術作家を支援するために、美術作品コンクールを開催します。これは芸術文化を創造する人材を積極的に支援・育成することを目的とする事業です。フレッシュな感性、情熱あふれる作品をお待ちしています。

●審査員

片岡真実氏(森美術館チーフキュレーター)

●対象

平面作品(壁にかけられるもの)。書、写真は対象外。

●資格

県内在住あるいは県出身者で18歳以上35歳未満の個人(平成25年4月1日現在)。

●規格

260cm×260cm(枠・額を含む)以内の作品2点まで出品可(未発表作品に限る)。裱装、額装あるいは容易にワイヤー・フック等で壁面展示可能なもの(ガラス・アクリルの使用不可)。出品料無料。

※1) 展示作品の天災、不可抗力、いたずら等による損害について主催者は責任を負いません。

※2) 作品に水、生花等生もの使用を禁止します。

※3) 裱装、額装などに不備のある作品は、受付できない場合があります。

※4) 展示後の作品は、加筆、撤去、配置替え等を行わないことを原則にします。

●日程

作品搬入：1月19日(土)・20日(日)9:00～17:00

一般鑑賞：1月22日(火)～27日(日)

高知市文化プラザかるぼーと 第1・第2展示室

公開審査：1月27日(日)14:00～16:00(表彰式16:00～)

●賞

最優秀作 1点賞金30万円、優秀作 2点賞金各5万円を贈呈。

また、最優秀賞受賞アーティストは、受賞後概ね1年以内に市民ギャラリーにて、高知市文化振興事業団主催の企画展を開催することができるものとします。

※ただし、同一作家の最優秀賞は3回までとする(優秀作はその限りではない)。3回目の最優秀賞時の副賞は作家と相談の上決定する。

●応募方法

所定の申し込み用紙(高知市文化プラザをはじめ、県内文化施設にて配布中。またホームページからダウンロード可)に必要事項を記入の上、作品の写真(制作中のものでも可)を添付し、1月5日(土)17:00までにお申し込み下さい(郵送・持参いずれも可)。これ以後も搬入日まで受付を行います。その場合には展示場所・目録掲載等に十分配慮できない場合があります。

●お申し込み・お問い合わせ先

〒780-8529 高知市九反田2-1

高知市文化振興事業団「美術作品コンクール」係

TEL 088-883-5071

●主催：公益財団法人高知市文化振興事業団



第7回 *Concours des Tableaux* 企画展

HEAVENLY

2012.12.4(火)～9(日)

高知市文化プラザかるぼーと 7階第5展示室
10:00～19:00(最終日は17:00まで) 入場無料

主催：公益財団法人高知市文化振興事業団

お問い合わせ：088-883-5071